

じょくそう

褥瘡（床ずれ）の勉強会

看護部褥瘡委員会

城西病院看護部褥瘡委員会の勉強会が3日に開かれ、大勢の看護師が参加して熱心に意見を交換しました。

褥瘡は、床ずれともいわれ、寝たきりなどで長期にわたり同じ姿勢でいることにより、血行不全などに伴った周辺組織などに壊死を起こす病態を指しています。褥瘡委員会は10年以上にわたって勉強会を開いてきました。

今回は、褥瘡の防止や治癒のため、どの看護師が見ても、症状の客観的な評価ができるようにするため、症状の経過評価や病状の評価を数値化する褥瘡評価スケール（DESIGN-R）の概要などについて説明し、質疑応答を行いました。

褥瘡評価スケールは、損傷の深さや大きさ、浸出液の量、炎症や感染の状況、肉芽組織の量・質、壊死組織の質、皮膚の下に隠れた損傷部の大きさを判定するポケットなどを数値化し、客観的に評価する手法で、日本褥瘡学会が作成した褥瘡状態評価スケールに基づいて開発されてきました。

評価するに当たり、損傷部について大きさは、

評価共有化、
治療に活用

最大部とその垂直最大部となる部分を測って面積で算出。壊死組織や炎症、感染などを目視して判断していきます。

質疑では「看護師それぞれが判断すると、ばらつきが出るのではないか？」などの疑問が示されました。この質問に対しては、「計測する時には、患者さんが常に同じ姿勢でいることが大切。多くの患者さんを比べたり、治癒の経過を見ていくことで、見る人によるばらつきを少なくしていきたい」と答えていました。

褥瘡委員会では、「褥瘡の状態を共有化し、重症度を比較することで、治癒の経過に生かしていきたい。褥瘡に対する薬は数多くあり、褥瘡の状態を数値化することで、治療の目安にもなっていくます」と話していました。

平成26年7月5日

